

世界の人的ネットワーク構築へのストラテジー

井田仁康

人間総合科学研究科助教授

ストラテジーのファースト・ステップ：世界を知ることは日本を知ること

著者の専門は社会科教育学で、とくに地理教育である。社会科教育学のような教科教育学では、世界の先端的な研究というよりは、それぞれの国の中で、どのような影響を受けながら、どのような教育内容、教育方法が実施されているのかを、各国の教育をお互いに検討しあい、自分たちの国の教育に反映させていくことが主となる。そのような各国の分析を通して普遍的な教育内容のモデルをつくることも試みられているが、いずれにせよ、まず自分の国の教育内容、教育方法を知り、それを分析する力が求められる。国際会議に出ても、まずは「あなたの国では？」という質問を受ける。そうしたことから、まずは日本の教育についてのしっかりした知識が必要となる。

教科教育学では、アカデミックな外国研究も一つの研究枠組みであるが、日本で外

国研究を分析し発表する場合には、日本との教育の比較は意識はされつつも、比較それ自体をテーマにしなくてもよい。そのため、日本の教育現場に貢献できない（貢献を意図としない）外国研究のあり方に批判する声があるぐらいである。しかし、世界に通じる学生を育成するためには、日本との比較を常に意識させ、日本の教育との関係を常に考えていなければならない。世界の社会科・地理教育研究者および実践者は、日本の教育に注目していて、日本の教育を紹介、分析することを求めているので、世界で通用する社会科、地理教育者を育成するためには、まず日本の教育の理解を深めさせ、世界の教育との関連を考えさせるような指導が必要となってくる。

ストラテジーのセカンド・ステップ：世界を対象としたフィールドを持たせる

日本の社会科教育、地理教育への知識を

深めさせつつ、日本の社会科・地理教育との比較できるような世界のいずれかの国、地域の社会科・地理教育のフィールドをもたせることが、次のステップの戦略である。これには大きく3つの理由がある。まず第1は、日本以外の国を研究対象とすることで、対象とした国・地域への関心、興味を高め、その国の様々な側面を見るようになり、日本との比較の視点が絞られてくるからである。また、その国の教育を調べることで、その国についての知識が増えるだけでなく、愛着心もわいてくる。

第2は、世界でフィールドをもつことで、そのフィールドに使われている言葉をマスター(理解)しなければならず、そのため、いやおうなく外国語に接することができるからである。英語なり、中国語なり、韓国語といった外国語に日常的に接する機会が、外国をフィールドにすることにより多くなる。

第3は、フィールドとした国・地域の人との交流を図れることである。この交流こそが世界に通じる学生となるための基盤と考えている。換言すれば、人的ネットワークを作ることである。

このように、日本以外の国・地域にフィールドをもつことによって、その地域への愛着をもたせ、異文化を経験し、人的ネットワークを構築することで世界への第一歩を踏み出させたい。

戦略のサード・ステップ：国際学会への出席、発信

日本の社会科教育、地理教育は世界からも注目されている。しかし、外国に関わる日本での研究の多くは、外国のカリキュラム、実践研究を分析し、日本国内で成果を発表するにとどまり、世界へ発信する機会が極端に少ない。国際学会では英語が使われるため、英語に堪能であることが有利であることは確かだが、英語でコミュニケーションをとろうとする熱意があれば、うまくない英語でもこちらが言わんとしていることを理解してくれたり、相手もこちらの英語力にあわせて話してくれることが多い。国際学会では、英語を母語としている人々ばかりが集まっているわけではないので、そのあたりは理解を得ることが多い。

とくに、地理教育の分野での国際会議では、大きい会場で発表するというよりは、いくつかのセッションに分かれ、こじんまりとした雰囲気の中で発表がおこなわれ、議論が進められる。そのため、時間的にも余裕があり、質疑などでもわかりやすい英語が使われることが多い。そのような雰囲気の中では、英語での日本からの発信もしやすくなる。

さらに、日本での学会発表で求められるものと、国際学会で求められるものとは、多少の違いがある。日本では、日本の教育

の発展のためにどのような理論が必要で、どのような教育実践を進めていくのかといったところが注目されるが、国際学会では、日本の技術や伝統がどのように教育に反映されているのかといったことへの関心が高い。そのような、日本国内と国際学会での関心の違いをも考慮しながら、発表する内容を選択していくとよい。

社会科教育、地理教育では、他の専門学問、とくに理工系の分野と異なり、先端の教育、共通の基盤というのあまり明瞭ではない。地理教育では、国際地理学会の中にも地理教育のセクションがあるが、他の地理学のセクションと地理教育のセクションは求めることが異なっているという印象をもっている。教育は、その国・地域の文化、

政策を背負っているのも、一本の科学的認識で論じられない側面が強い。したがって、地域の独自性を反映した教育に互いに感心をもつ。それと同時に、共通性も存在し、共通的事項の各国の協力態勢、互いの情報交換も学会の場では重要となる。日本の教育についても受信だけでは情報交換にならない。発信することから情報交換が成立する。そして、発信することにより世界の研究者や実践者に認知されることになる。

コミュニケーションとしての地図の活用

日本からの情報を発信する場合、地理教育では言語だけでなく、表、図、地図といったコミュニケーション手段がある。それは時として、言語よりも強いコミュニケー

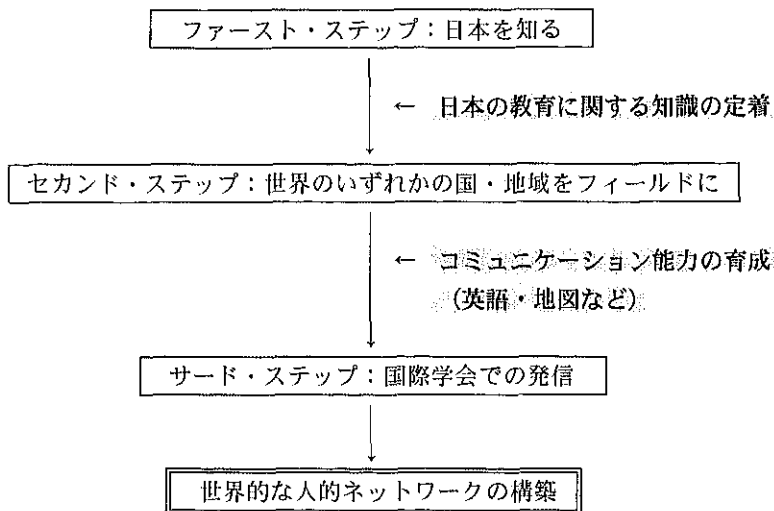


図 世界的な人的ネットワークを構築させるためのストラテジーのプロセス

ション手段となる。したがって、社会科教育、とくに地理教育では、地図の作成、読み取りといったスキルが重要になる。こうしたスキルは地理という学習内容だけでなく、世界で通じる学生のもつコミュニケーション能力としても意味をもつ。

世界の人的ネットワークの構築へ

以上のようなステップを踏むことで、世界の研究者、教育実践者への人的ネットワークを広げることができる。社会科教育、地理教育の場合は、国際学会でも研究者だけでなく、多くの教育実践者がかかわっている。そのため、共通の言語である英語力よりも、地図などのスキルがコミュニケーションとして重視される場合もある。

このようなコミュニケーションを図って結ばれる世界の研究者、授業実践者とのネットワークが、今後の教育、研究にも生かされてくる。社会科教育、とくに地理教育においては、「世界に通じる学生を育てるための戦略」は、図のような世界的な人的ネットワークを構築するためのストラテジーとしてまとめることができるのである。
(いだ よしやす/学校教育学)